「誰一人取り残さない学級経営」

「『なるほどタイム』を活用した学級会活動」

佐賀県佐賀市立川上小学校
教諭　豆田　稚奈

１　主題設定の理由

学級経営の充実のために、児童によるよりよい生活づくりや人間関係づくり、日常の生活や学習への適応などを内容とする特別活動は重要な役割を果たす。特別活動が充実することにより、児童の自治的能力を高めたり、互いの良さを生かして自分たちの学級生活をよりよくしようする意識が高まったりすると考える。自ら楽しく豊かな学級や学校の生活を作りたいという課題意識をもって、指示待ちではなく、自分たちで問題を見付けたり話し合って解決するなど「児童による、児童のための活動」である特別活動を通して、「誰一人取り残さない」学級経営を目指したいと考えた。

２　研究のねらい

「誰一人取り残さない」学級経営を実現するために、学級会活動に焦点を当て、「なるほどタイム」という学習法を取り入れた。「なるほどタイム」は、意見を絞ったり、最終決定したりする前に自由に席を立って様々な人と意見交換をする時間である。「なるほどタイム」のメリットは４つ考えられる。１つ目は、全体の場での発表より、個人同士の方が気軽に話合いに参加できる。２つ目は、自分と同じ意見の人と話すことで安心感が生まれ、その後の発表に自信をもつことができる。３つ目は、同じ意見であっても、なぜそれが良いのか意見を聞くことで自分とは違った理由がある場合、更に自分の考えを深めることできる。４つ目は、違う意見の人と話すことで自分の考えと比較し、どれが最適解か考え、自分の意見に広がりが生まれ、話合いや事後の活動をより「自分事」として捉えることができる。また、「なるほどタイム」後の発表では、友達の意見もまとめて発表することができるように設定しており、発言が苦手な子の意見も含め、より多くの児童の意見を吸い上げることができると思われる。しかも、自分の話した意見が集団決定に結び付けば、自己有用感や達成感を味わうことができると考えられる。

３　研究の仮説

【仮説①】学級会の話合い活動で、なるほどタイムを設けることで、話合い活動において「自分事」として参加する意識が高まるであろう。

仮説①では、年間を通して学級会を実施し、毎回の学級会を動画で記録したり、児童へのアンケート調査を実施したりして、児童の発言や行動を見取る。

【仮説②】なるほどタイムを活用した学級会をすることで事後の活動や他教科等でも生かされ、誰一人取り残さない学級経営に結びつくであろう。

仮説②では、話合い活動後の実践の様子や、児童が書いた振り返りを基に、児童の学級への所属感や自己有用感の高まりを見取る。

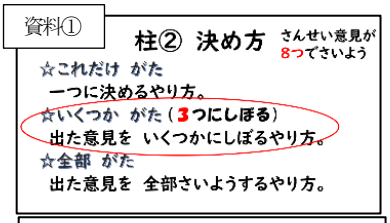
４　研究の検証

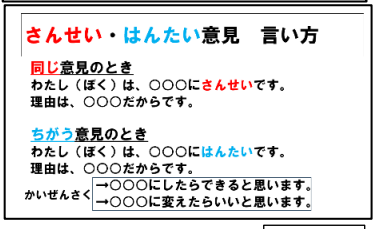
【仮説①】の検証

（１）１年を通して行った学級会での教師の働きかけ

学級会で行った教師の働きかけは３つある。１つ目は、学級会のワークシートにあらかじめ目を通しておくことである。これは子供たちの考えの傾向を把握するために行う。話合いの時にめあてや議題に沿っているような望ましい意見をもつ児童に声をかけたり、「なるほどタイム」で孤立している児童への声かけをしたりという意図的な声かけを行う際に生かすことができる。２つ目は、電子黒板に話型（資料①）や流れ、柱ごとの決め方（資料②）などを提示し、視覚的支援を行うことである。必要に応じて資料を提

資料①





資料②

示することで、今どんな話合いをしているのかを分かりやすくしたり、発言したくても、仕方が分からない児童を助けたりすることができると考える。３つ目は、学級会活動を振り返る掲示物（資料③）の作成である。板書や実践の様子、活動で得た子供たちの学びや振り返り等をまとめた。子供たちが毎日目にする廊下に掲示することで、次回の活動への意欲継続をねらった。また、通りかかる教師や保護者が来校する際などにも掲示物を見て様子を知ってもらい、頑張りを褒めてもらうことで自己肯定感の向上も期待できると思われる。

資料③

（２）年間を通して行った学級会の困り感とその改善

△意見を出し合う段階で時間を取られてしまっている。⇒ワークシートを基に黒板に意見を提示し、出ている意見の下に自分のネームプレートを貼ることで誰がどんな意見なのか一目で分かるようにする。これは、「なるほどタイム」でも話す相手を選ぶ参考にもなると考えた。

△「なるほどタイム」のテーマが明確ではなかったため、「なるほどタイム」でどんな話をすればよいのか戸惑う児童や誰とも会話しない児童がいた。⇒「なるほどタイム」のテーマを提示し、明確にした。特別支援学級在籍の児童や場面緘黙傾向のある児童は様子を見ながら、困っているようなら声かけを行った。

△「なるほどタイム」後の発表で、賛成意見をまとめて発表する際、何人分発表してよいのか上限を決めていないと、一人の発表で一気に決定に近付いてしまい、少数意見を持つ児童の意見が拾いにくくなってしまう状況が考えられる。⇒「なるほどタイム」後の発表で意見をまとめて発表する場合は３名までと上限を決めた。

（３）アンケート実施とその結果から考えられる考察

児童への意識調査として、７月と２月にアンケート調査を実施した。（クラス 31 名中 29 名が回答）

①3 年１組はどんなクラスですか。（複数回答可）

7 月元気いっぱい…14 名、思いやりいっぱい…４名、楽しい…８名、えがおになる…２名、明るい…２名、がんばる…1 名、いい…１名

2 月楽しい…8 名、明るい…７名、元気いっぱい…5 名、えがおいっぱい…3 名、良い…２名、最後まであきらめない…1 名、いごこちがいい…1 名、思いやりがある…１名、きょうりょくし合う…1 名、はげましてくれる…1 名、友達おもい…1 名、やさしい…1 名、仲がいい…1 名

考察⇒７月は、学級目標に含まれる言葉を用いて回答している児童が多かった。一方２月は、７月の回答にはなかった最後まであきらめない、いごこちがいい、などの回答が多数見られた。これは振り返りの活動や校内の教員の声かけや励まし、保護者からのメッセージを通して、児童が自分の学級を多角的に見ることができるようになったからではないかと考えられる。

②学級会はやってよかったですか。そのように答えた理由を教えてください。

7 月よかった…22 名、まあまあよかった…７名、あまりやらなくてもよかった…０名やらなくてもよかった…0 名

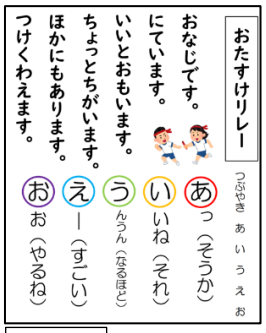
2 月よかった…26 名、まあまあよかった…３名、あまりやらなくてもよかった…０名、やらなくてもよかった…0 名

考察⇒７月、２月とも「あまりやらなくてよかった」「やらなくてよかった」の回答がなかった。７月の理由は、「楽しかったから」「思い出ができたから」や「みんなとなかよくなれたから」が多かった。一方、２月の理由では、７月の理由に加えて、「話合いすることが大切だと思ったから」や、「学級会で決まったことをじっこうすれば、みんながえがおになれたから」というような意見も複数見られ、児童の学級会に対する満足度や意識の高まりが見られた。また、２月は「よかった」の回答が増えたことから、活動を重ねるにつれて学級会の意義を実感していると考えることができるだろう。

③学級会で自分の考えを伝えるのはすきですか。そのように答えた理由を教えてください。

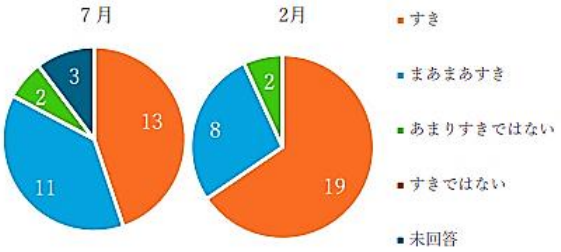
考察⇒７月は、「すき」「まあまあすき」と答えた児童が半数近くいたが、「まあまあすき」の意見の中にも、

「人前で話すのが苦手」や「考えが言えたり言えなかったりする」「緊張してしまう」といった、「すき」と言い切れない児童の声もあった。このことから、学級のみんなの前で発表するのには、抵抗があるが自分の思いや意見を伝えたいと思っている児童がいることが分かる。一方２月は、「すき」と回答した人数が８名増加した。「すき」に変わっていた児童の中には、「自分の意見をみんなに聞いてほしいから」や「意見を言うと賛成してくれる友達がいるから」という意見が多かった。これは、学級会での教師の働きかけの２つ目にも書いた、電子黒板での掲示物（資料④）が功を奏したと考えられる。それらを活用して意見をつないだり、反応しながら話を聞くことができている児童を司会グループの観察が褒めたり、教師がその場で褒め、取り上げることで自然と相づちや友達の意見をつなげて自分の意見を言う児童が増え、発表することに抵抗がなくなっていったからではないかと思われる。



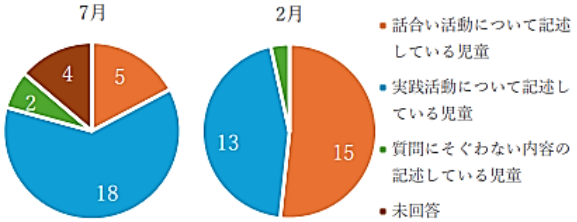
資料④

④学級会の中の「なるほどタイム」はすきですか。そのように答えた理由を教えてください。



考察⇒７月の「あまりすきではない」と答えた児童２名は、「誰と話せばいいか分からないから」という理由だった。やはり「なるほどタイム」でのテーマを明確にすることが重要だと思われる。２月は、「すき」と回答する児童が増えたものの、「あまりすきではない」と回答する児童も２名いた。１名は、７月と同じ児童であり、２月の理由は、「自分の考えよりの他の意見の方が人気があり、自分の意見と同じ人が少ないから」というものであった。今後、この児童も友達の意見を聞くことの意義を実感したり、自分の意見を友達に伝えて共感してもらったりする経験があれば、変容が見られる可能性もあると考えられる。

⑤学級会でうれしかったこと、楽しかったことはなんですか。理由も教えてください。



考察⇒７月は、実践活動が楽しかったという記述が６割以上で、話合い活動についての記述は、２割以下だった。一方２月は、話合い活動についての記述が増え、実践活動についての記述数を上回った。話合い活動について記述している児童の理由で多かったのは、「みんなと話せたのが楽しかった」や「自分が発表した意見が採用されたから」である。このことから、実践活動だけでなく話合い活動が子供たちにとって記憶に残る、充実感のあるものであったと考えられる。

（４）抽出児Ａ、抽出児Ｂのストーリー

本研究では１年間を通して、２人の児童を抽出し、行動の変容を追った。学級会での言動の変容を見取るため、毎回の学級会の様子を動画で記録し、発言の回数や内容、動きの観察を行った。抽出児Ａは、特別活動のみならず何事においても意欲的で、主体的に学ぼうとする姿が見られる児童である。抽出児Ｂは、場面緘黙症があり、人見知りが激しく学級の友達と関わるのが難しいため、個別に支援が必要な児童である。

抽出児Ａの変化 １回目の学級会では、発言回数は９回。司会グループでありながらも積極的に意見を出していた。「なるほどタイム」では、近くの児童と話をしていた。２回目からは、他の児童も発言回数が増えたため、挙手をしていたが、発言回数は４～６回程度であった。「なるほどタイム」では、回数を重ねると１つの小集団だけでなく、複数の小集団の話合いに参加してより多くの友達の話を聞こうとする姿や「なるほどタイム」後に、３人分の意見をまとめて発表する姿が見られた。

抽出児Ｂの変化 １・２回目の学級会の発言回数は０回。個別に声かけを行うも反応が薄く、発言はなかった。「なるほどタイム」でも誰とも会話をしなかった。３回目の学級会からは、担任と一緒に読み上げて発表をしたり、指名されて発表が難しそうな時に、近くの児童が一緒に読んであげたりすることで毎回１回ずつ

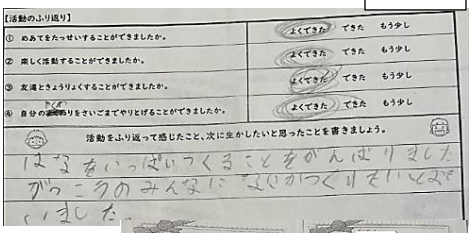
は発表することができるようになった。「なるほどタイム」でも、教師が声かけ後に抽出児Ｂとある程度関係性のできている児童と会話したり、近くにいた児童が抽出児Ｂに話しかけ、その児童が抽出児Ｂの意見もまとめて発表したりするなど１・２回目の時との違いが見られた。

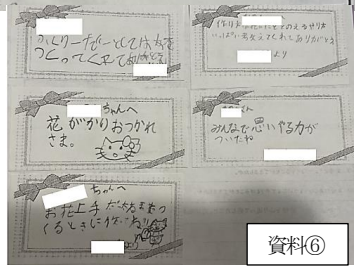
考察⇒抽出児Ａは、回数を重ねるごとに、「なるほどタイム」での言動がより周りに目を向けたものになり、話合いを活性化させたと思われる。抽出児Ｂは、発言回数の増加や、「なるほどタイム」で会話する姿が見られる等の変化があった。このことから、「なるほどタイム」の実践を継続することは、意欲的で、主体的に学ぼうとする児童にも、学級の友達と関わるのが難しく、個別に支援が必要な児童にも有効な手段だと考えられる。

【仮説②】の検証

（１）事後の活動で見られた児童の様子

資料⑤





資料⑥

①抽出児Ｂが第２回の学級会で決まった「思い出ブック」の作成委員に友達から誘われ、作成を行った。また、第３回の学級会で決まった「運動会の入場門づくり」では、花紙で花を作成するチームの副リーダーに推薦され、本人も承諾していた。どちらも友達からの後押しがあってのことだが、本人は楽しんで活動しており、「みんなのために頑張りたい」という思いが芽生えたようである。（資料⑤）また、友達からのメッセージ（資料⑥）も良い影響を与えたのではないかと考えられる。

②学級会後の具体的な内容を決める話合い活動を子供たち主導で行うようになった。司会グループが、話し合う時間が欲しいと教師に申し出てくることがあったため、朝の時間や帰りの会の時間で「ミニ会議」を何度も実施した。また、その際も教師側から指示せずとも「なるほどタイム」を設けたり、フロアの児童から「なるほどタイム」を要求することがあったりと、子供たちの中に「なるほどタイム」が話合い活動の際の有効的な手段として内面化されているということが言えるだろう。

③運動会の入場門づくりではリーダー中心で自主的に制作を行っていた。その様子をいろいろな先生に見に来てもらい、励ましてもらったり、当日までに作成の様子を学級通信で保護者にお知らせを行ったりし、後日先生や保護者からのメッセージを掲示した。その結果、児童の自己肯定感や自己有用感を高めることにつながったのではないかと思われる。この掲示物は、児童がいつでも見られる廊下に年間を通して掲示を行った。（資料③）他の活動の際には他の学級を招待し、「楽しかった」や「ありがとう」などのメッセージをもらうことで、学級間での交流にもつながったと考えられる。掲示物を見ながら他の学級の児童と談笑する児童の姿も見られ、友好関係の幅を広げるきっかけになったと思われる。

５　成果と今後の見通し

本研究を通して、学級経営の充実のために特別活動、主に学級会活動は重要な役割を果たすと分かった。話合い活動の中で「なるほどタイム」を設けることで、全員が「自分事」として話合いに参加することをねらい、実践を行ってきた。話合い活動を積み重ね、子供たちの話合い活動に対する意識や行動の変容を量的、質的にも向上したと見て取ることができたのではないかと思う。今後、更なる自治的能力の向上につなげるためには、児童と教師がお互いに目指すゴールを明確にし、その到達に向かい、児童自らが学級の問題点やよりよい生活、人間関係づくりについて取り組もうとする姿勢を育む教師の細やかな仕掛けや支援が必要だと思われる。これからも「誰もが参加できる」学級会活動を通して、「誰一人取り残さない」学級経営を目指して取り組んでいきたい。

【引用・参考文献】

・文部科学省『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　特別活動編』

・文部科学省　国立教育政策研究所　教育課程研究センター『楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動　小学校編』（平成 26 年９月発行）